論説

北スマトラのトバ・バタック村落における葬制と墓制

――死去時の葬儀と埋葬方法にみられる連続と変化――

池上　重弘

はじめに

一八九二年から一九〇八年にかけて、北スマトラ中央高地に広がるトバ・バタック（以下トバと省略）社会でキリスト教布教活動に従事したドイツ人宣教師ヴァルネックは、トバ社会においては、すでに土葬されていた祖先の遺骨を掘り出し、水牛や牛の供犠を伴う盛大な改葬儀礼を経て改葬墓に遺骨を再安置する複葬慣行が存在する旨を報告している〔Warneck 1909：84-5〕。西洋建築技術の導入以前、トバの改葬墓は、植樹した盛土の墓ないしは彫刻を施した石棺や石甕など石造の墓であったが、オランダ統治下の一九二〇年代になると、外部からもたらされたセメントを用いた墓の建立が始まった〔Barbier 1983：113-39〕。今日トバの土地を訪れる時、モルタル塗りの墓が互いにその壮麗さを競い合うかのように林立する様子を見落とすことはないであろう。

一八六〇年代に開始されたドイツのライン伝道協会による布教活動によって、プロテスタント（ルター派）に改宗したトバ人が相次ぎ、トバの村々にキリスト教が浸透した〔Pedersen 1970：47-72〕。布教当初、ライン伝道協会は祖先崇拝を目的

に行われる改葬儀礼を禁止したが、その後二〇世紀の第一四半期に定められた教会規定において、遺骨への供物の献呈など異教的要素の排除を条件に改葬を容認したため、キリスト教徒のトバ人による改葬が現在でも続けられているのである〔Schreiner 1994：174〕。

本稿に先立つ別稿において、私はあるトバ村落（以下L村とする）の事例に基づき、改葬墓建立の歴史的変化の様相を具体的に跡付けた。そこで例証されたのは、①L村をはじめトバ湖南東岸地域においては、オランダ時代初期の植民地首長に関連した石棺が多かったと考えられること、②今日トバ村落の景観を特徴づけるモルタル塗りの改葬墓の建立は二〇世紀前半にも認められるが、一九六〇年前後から顕著になること、③改葬増加の背景には都市移住者と故地の村人との密接な関連が認められることの三点であった〔池上一九九五；Ikegami 1997〕。しかしながら、その際の議論は二次葬である改葬に限定されていたため、一次葬である死去時の葬儀や埋葬方法について詳述できなかった。トバ社会の葬制・墓制に関する従来の研究においても、この点は十分に論じられてきたとは言い難い。トバの葬制・墓制を特徴づける改葬が複葬慣行における二次葬としての性格を持つ以上、一次葬との関連を視野に入れた研究が不可欠であろう。そこで本稿では、トバ社会における一次葬の区分と埋葬方法の違いを明らかにした上で、先述のL村の事例に基づきながら、死去時の葬儀や埋葬方法にみられる連続と変化について検討したい。[1]

一　トバの社会と宗教

トバ湖周辺域に広がるトバの故地は、現在の北タパヌリ県にほぼ一致している。L村はトバ湖南東岸地域の西端に位置しており、一九九〇年の人口センサス概況によると、世帯数は二三〇、人口は一〇六三人である〔Kantor Camat Balige 1992：157〕。L村における主たる生業は、水田耕作、畑作、湖での小規模な漁業であるが、地元で公務員や教員となる者もいる。L村の年長者たちによると、この地域がオランダ支配下に入った一八八〇年代以降、農地の開墾に従事する農民と

して、あるいはオランダ政庁やプランテーションの事務職員として、L村から北スマトラの東海岸部へ移住する者がいたが、独立戦争（一九四五年―一九四九年）後、東海岸部にあるかつてのプランテーションの跡地に入植する村人が急増したという。[2] 都市居住のトバ人に関するブルーナーの諸研究〔たとえばBruner 1972〕からも明らかなように、独立後は北スマトラ州の州都メダンやジャワ島にある首都ジャカルタに移住して社会的・経済的成功を収める者も少なくない。

トバ社会は父系制社会であり、マルガ（*marga*）と称される父系氏族が外婚単位となっている。フラフラ（*hula-hula*）と称される妻与集団（wife-givers）、ドンガン・トゥブ（*dongan tubu*）と称される自らの父系氏族、そしてボル（*boru*）と称される妻受集団（wife-receivers）の三者は、「かまどの三つの石」を意味するダリハン・ナ・トル（*dalihan na tolu*）と呼ばれる。この三者間の関係は、結婚式や葬式、改葬儀礼などのアダット（*adat*、慣習法）儀礼においてのみならず、トバ人の社会関係の基軸をなしている。妻与集団は妻受集団に対して霊的な優位性を有すると考えられており、社会関係においても優位におかれる。

フタ（*huta*）と称されるトバの集落は、長方形の敷地を持ち、中央の広場を挟んで数世帯から十数世帯の家や穀倉が対面する空間である。オランダ支配以前は対立するフタから襲撃を受けることがあったため、防御の目的からフタの周囲に土塁を築き、その上に竹を植えた。現在でもこうした土塁が残存していることが多く、遠方から眺望すると、フタは水田の海に浮かぶ島のように見える。親族関係や農業水利上の理由に基づき、多数のフタが結びついたものがホルジャ（*horja*）である。フタが日常生活における協同の単位であるのに対して、ホルジャは共有地に関する事項の協議単位であるとともに、アダット儀礼を執行する際の単位であり、慣習村としての性格を強く有する。L村は、デサ（*desa*）と呼ばれる行政村であると同時に、ホルジャでもある。

トバ社会においては夫方居住が一般的である。通常、トバの男性は結婚と同時に親元から独立し、親と同じフタないし近隣のフタに新しい家を構え、妻はそこに婚入してくる。ただし、妻方居住もまれではない。妻の親の面倒を見る必要がある場合、または妻方が裕福で土地や財産が豊富な場合には、夫が妻方のフタに居住することがあるし、夫が妻の親と同

居することさえある。詳細な系譜調査を実施したL村内の四つのフタにおいては、五二世帯のうち、妻方居住は七世帯あり、このうち三世帯が妻の親と同居していた。[3]

今日ほとんどのトバ人はキリスト教徒であると言われているが、彼らの霊魂観に関しては、在来宗教のそれが完全に払拭されたとは言い難い。一九二〇年代後半に行政官として北タパヌリに駐在したフェルハウエンがトバの在来宗教における霊魂観について記述したところによると、死者の魂であるベグ(*begu*)は生者に対して両義的な存在であり、祖先のベグに対して子孫が十分な崇敬の念を抱き、然るべき供物の提供を怠らずにいる場合には、ベグは子孫に対して恩恵や加護(豊作や子孫の繁栄など)をもたらすが、そうでない場合は災禍や不幸(凶作や子供の死亡など)を引き起こすという〔Vergouwen 1964：69〕。ヴァルネックによると、スマンゴット(*sumangot*)と称される上位の祖霊はベグよりも多大な恩恵や加護をもたらしうるという信仰に基づき、改葬を通じて子孫たちが祖先のベグをスマンゴットに祭り上げるが、その際、男の孫を持つことがスマンゴットになりうる条件、すなわち改葬されうる重要な条件とされている[4]〔Warneck 1909：84〕。キリスト教徒である今日のトバ人が改葬の動機について語る時にも、このような在来宗教の霊魂観に立脚した祖先崇拝の観念が基本的には存続していることがうかがわれた。

二　葬制と墓制

本節では、L村や近隣村落での観察と聞き取りの結果をもとに、葬儀の区分と埋葬方法の相違についてまとめる。

(A)　一次葬における葬儀の区分[5]

トバ社会における葬儀の区分は、死者や遺族の社会的威信や経済力を反映したものではない。表1に示したように、トバ社会の葬儀は、死者の結婚・未婚の別、子供(特に男児)の有無、父系子孫としての男の孫(息子夫婦から生まれた男の孫)

表1　系譜存続への貢献度に応じた葬儀（一次葬）の区分と改葬の可否

葬儀（一次葬）の区分	テクノニミー体系での呼称法[1]	供犠獣	マノルトル	改葬
a．サウル・マトゥア 息子夫婦から生まれた男の孫がおり、子供が皆すでに結婚している場合	オップ・シ ― （―のおじいさん/おばあさん）	水牛・牛可	あり	可
b．サリ・マトゥア 息子夫婦から生まれた男の孫がいるが、子供のなかに未婚者がいる場合、あるいは孫がいても子供が娘のみ	同上[2]	水牛・牛可	あり	(可)[3]
c．マテ・マッカル 孫はないが、子供に男児がいる場合	アマ・ニ ―/ナイ ― （―のお父さん/お母さん）	ブタ	なし	(可)[4]
d．マテ・プヌ 孫はなく、子供が女児のみの場合	同上	ブタ	なし	不可
e．マテ・プルプル 結婚しているが、子供がいない場合	個人名	白ヤギ可	なし	不可
f．マテ・ポンゴル 未婚者	同上	―――	なし	不可

1)：長子誕生以降の人の個人名を呼ぶことは強い禁忌とされるため、以下のように変化するテクノニム（子や孫の個人名に基づいた呼称）が用いられる。すなわち、ある人の個人名をX、長子（男女不問）の個人名をY、父系ラインの初孫（息子夫婦の長子、男女不問）の個人名をZとすると、(1)幼少の時分から長子誕生まではX、(2)長子誕生から父系ラインの初孫誕生まではアマ・ニ・Y（Yのお父さん）ないしナイ・Y（Yのお母さん）、(3)父系ラインの初孫誕生以降はオップ・シ・Z（Zのおじいさん/おばあさん）と呼ばれる。父系社会であるにもかかわらず、YやZにあたる子や孫の名が女児の名でも構わないのは、女児誕生が近い将来の男児誕生の前触れとして歓迎されるからである。

2)：子供が娘のみの場合、初孫（男女不問）の個人名（Wとする）をとって、オップ・ニ・シ・Wというテクノニムが用いられる。父系ラインの孫を持つ場合と比較して「ニ」（英語の of に相当）という前置詞が付加されているが、意味は「Wのおじいさん/おばあさん」である。

3)：死者に娘しかいない場合は、たとえその娘（たち）夫婦から生まれた孫がいたとしても、父系子孫としての孫ではないため死者は改葬の対象とならない。

4)：死去時に孫がいなくても、その後その死者の息子夫婦から生まれた男の孫ができれば改葬されうる。

の有無、子供の結婚・未婚といった、父系出自に基づく系譜存続への貢献度の違いに応じて類別されている。

孫を持つ人の葬儀には、サウル・マトゥア（*saur matua*）とサリ・マトゥア（*sari matua*）の二種類がある。前者はトバ社会において最も望ましい葬儀とされる。サウルは「長寿に達すること」を意味し〔Sarumpaet 1994：247；Warneck 1977：224〕、マトゥアは「幸運・幸福」を意味する〔Sarumpaet 1994：292-3；Warneck 1977：270〕。長寿に達し、すでに父系子孫としての男の孫を持ち、子供も皆全て結婚している場合がこれに相当する。一方、サリ・マトゥアのサリは、「気遣っている、心配している」といった意味を有する〔Sarumpaet 1994：264；Warneck 1977：223〕。サウル・マトゥアとの対比を念頭においてサリ・マトゥアについて言及する際、L村の村人たちはしばしば「まだ考えなければならない者が残っている」という表現を用いた。すなわち、すでに父系子孫としての男の孫を持つが、子供の中に未婚者が残っている場合がサリ・マトゥアなのであり、未婚の子供の存在が気遣いの種と捉えられているのである。また、死者に息子がいない場合は、娘たちが全て結婚し、娘夫婦から生まれた孫がいたとしても、葬儀はサリ・マトゥアと称される。

ここでは葬儀の過程の詳述を避けるが、サウル・マトゥアおよびサリ・マトゥアを特徴づける儀礼の要素として、水牛や牛などの大型獣の供犠と、踊りによる儀礼的交歓を指摘することができる。

トバ社会において、結婚式、新築儀礼、葬式、改葬儀礼などが、アダットに則った正式なものとして社会的承認を受けるためには、供犠獣の肉の分配が不可欠とされている。これは、供犠獣の頭部や臀部など各部位を、一定の分配方法に基づいて同じ慣習村の者たちや妻与集団・妻受集団など主要な参会者に分配するもので、ジャンバル（*jambar*）と称される。孫を持つ人の葬儀の場合、葬儀に先立って行われる慣習村の主だった成人男子との会合において、遺族は水牛の供犠を求められることが多く、極端に経済状態が劣悪な場合以外は、水牛を屠ってジャンバルが行われる。

踊りによる交歓はマノルトル（*manortor*、「踊る」を意味）という語で表現される。そこでは、故人の配偶者や故人の子供たちおよびその配偶者たちが、同じ慣習村の者たちや妻受集団・妻与集団の者たちと順次対面して並び、儀礼的挨拶を交わした後、起立したまま踊る一方の前を、他方の一団が踊りながら進行する。その際、霊的劣位にある妻受集団側は霊的

優位に立つ妻与集団側を拝むように両手を合わせたり、相手のあごに軽く手を触れるようなしぐさをする。妻与集団側は妻受集団側の肩に軽く手をのせたり、頭を包み込むようなしぐさで踊る。妻与集団側は、霊的な力の象徴と信じられているウロス（*ulos*）という織物を広げ持って妻受集団側の前にかざしながら踊る場合があるし、さらにウロスで妻受集団側の者の肩を包み込み、そのウロスを与えることもある。通常マノルトルは、ゴンダン（*gondang*）と呼ばれる打楽器オーケストラの伴奏に合わせて行われる。ゴンダンの基本的な編成は大きさの異なる六つの太鼓、四つのゴング、そしてサルネ（*sarune*）というオーボエに類似した木管リード楽器からなり、数人の楽団によって演奏される。[6]

子供に男児はいるがまだ孫を持たない人の葬儀は、一般にマテ・マッカル（*mate mangkar*）と称される。インドネシア語のマティ（*mati*）に相当するマテは、「死」を意味する。マッカルとは「終了していない」という意味であり〔Sarumpaet 1994：188〕、子供の養育がまだ残っていることを指し示す。子供が女児のみで男児がいない場合は、マテ・プヌ（*mate punu*）といって区別する。プヌは「子供、特に男児がいないこと」を意味する〔Warneck 1977：192〕。父系制のトバ社会においては、女性は原則として婚出する存在であり、たとえ妻方居住をして結婚後も生家に留まったとしても、出身父系氏族の系譜存続には寄与しない。ある個人についていうと、子供が女児だけだと男子の子孫でたどる父系の系譜のつながりが途切れることになり、将来系譜の記憶から消失してゆくことになるのである。このため、マテ・プヌはマテ・マッカルと比較して、より悲痛なものと捉えられる傾向が強い。これらの葬儀の場合、通常マノルトルは行われない。その理由として、「葬儀におけるマノルトルはガベ（*gabe*）の証しとして行われるものなので、孫がいない場合には行われないのだ」と説明されることが多かった。ガベとは子孫の数が多いことであり、トバ社会においては、理想的な人生のあり方として高い価値が置かれている。[7] また、これらの葬儀では大型獣の供犠も認められない。通常はブタを屠ってジャンバルの際に分配する。

結婚していても子供がいない人の葬儀はマテ・プルプル（*mate purpur*）と称される。プルプルとは、「揺り動かされる」ないし「風で運び去られる」という意味である〔*ibid.*：193〕。稲作の収穫後に種子を選り分ける風選もプルプルといわれるが、ある村人は、「風選の際、空の籾は風に吹かれて飛散してしまう。子供がいない人は、飛散して地に根付かない空の籾

のようなものだ」という説明を私に対して与えた。この場合、マノルトルは行われない。私は直接確認していないが、ジャンバルが行われるとしても、白ヤギを屠るだけであるという。

マテ・ポンゴル（*mate ponggol*）とは、未婚のまま死亡した人の葬儀である。ポンゴルは「断片、かけら」を意味し、そこから転じて「途絶えた、途切れた」という意味でも用いられる言葉である〔Sarumpaet 1994：217；Warneck 1977：187〕。この場合、讃美歌を歌ったりキリスト教式の祈禱をあげるだけで、その日のうちに埋葬してしまう。

（B）一次葬における埋葬方法の区分

次に、一次葬における埋葬方法について検討したい。キリスト教浸透以前も以後も、トバ社会では遺体は木棺に入れられて埋葬されるのが一般的である。[8] 土葬した墓所にはどのような墓が築かれるのか、ここでまずL村に居住しアダットに詳しいと目されるある七〇歳代の男性の言葉を引いてみよう。

> 今はセメントを用いた墓も作られるが、もともとは死者を埋葬した場所には土の墓が作られた。子供や若者はもちろん、結婚していてすでに子供がいたとしても、孫を持たない死者の墓はタノマン（*tanoman*）と呼ばれるものである。タノマンは遺体を土葬した場所に土を盛り寄せただけの単純なものであり、盛土を段にして積み重ねたり、盛土の上に草木を植えることは認められない。これに対して、孫を持つ死者の墓をタンバック（*tambak*）という。これは大きな直方体状の盛土ないしは盛土を段にして積み重ねたもので、段の数は通常は三段の場合が多いが、三段から七段までの奇数段でなければならない。さらに死者が孫を持つことの印として、タンバックの上にはオップオップと呼ばれる草を植える。

ここではトバ社会の墓について三つの基本的理解が示されている。その第一は、一次葬の墓は遺体を土葬した上に築か

れる盛土であるという点である。第二は、孫の有無で盛土の形態に明白な差異があるという点である。そして第三に、孫を持つ死者の盛土には特定の植物が植えられると指摘されている。これらの三点は、今言葉を引いた男性だけでなく、私が葬制と墓制について聞き取りをした多くのトバ人が共通して述べたことである。[9] ただし、オップオップ（*ompu-ompu, Haemanthus pubescens*）というヒガンバナ科の球根植物を入手できない場合には、それに類したバクン（*bakung, Crinum asiaticum*, 和名ハマオモト）やサンゲ・サンゲ（*sangge-sangge, Cymbopogon citratus*, 和名レモングラス）を盛土の上に植えることがあると指摘する者も少なからずいた。[10]

私の観察でも、右に記したような盛土の墓が現在でも作られていることは確認できたが、L村をはじめ今日のトバの村では、一次葬の墓であっても、石材やレンガを組んで石灰やセメントないしその混合物を用いたモルタルで仕上げた墓（以下、便宜的にモルタル埋葬墓と称する）が数多く存在している。こうした墓の規模は大小さまざまである。墓所の周りを囲っただけの簡単な造りで小規模なものは、タテ八〇cm、ヨコ六〇cmほどで、高さは三〇cmにも満たない。一方、大規模なものでは、未婚のまま病死した男子大学生の個人墓であるにもかかわらず、数平方mの敷地に建立された立体建造物で、内部に棺桶を安置する構造の墓もある。

さきほどの引用の中では、一次葬の墓の名称としてタノマンとタンバックの二つが言及されていた。しかし、今日モルタル埋葬墓も一般化するにつれ、墓の名称も多様化している。モルタル埋葬墓を指し示す語として、インドネシア語で「印」を意味するプルタンダ（*pertanda*）という表現が墓標というニュアンスで用いられるし、同じくインドネシア語で「墓」をあらわすマカム（*makam*）やクブラン（*kuburan*）といった表現も広く用いられる。ただし、孫を持つ死者の墓はあくまでもタンバックと呼ぶべきだと主張する者もいる。

（C） 改葬墓の変化

本稿の議論の焦点は一次葬での葬儀と埋葬方法に絞られているが、この後の記述との関連から、ここでトバ社会におけ

る改葬墓について略述しておく必要があるだろう。[11]

トバの古い改葬墓として、「高い盛土」を意味するタンバック・ナ・ティッボ（*tambak na timbo*）と、「堅い石」を意味するバトゥ・ナ・ピル（*batu na pir*）の二種類が頻繁に指摘される。前者の典型的な形態は、階段状の盛土を三段から七段の奇数段に積み重ね、その上にバリンギン（*baringin, Ficus benjamina*, 和名シダレガジュマル）ないしハリアラ（*hariara, Ficus*, クワ科の常緑高木）が植樹されたものと説明されることが多いが、実際には高さ一mほどの単純な塚に植樹されたものや、自然の丘を利用したものを観察することが少なくない。[12] 後者は、石工によって彫刻を施された石棺である。その形態は、前後部分が上方に反った切妻屋根を持つ、トバの伝統家屋のシルエットに類似したものが多い。[13] 石棺用の石を調達するには、多人数による牽引作業が必要とされたという。

二〇世紀前半から、石材を組んでモルタルで仕上げる改葬墓（以下、これをモルタル改葬墓と称して、先述のモルタル埋葬墓と区別する）が建立されるようになった。[14] モルタル改葬墓の形態は、石棺の形態を模倣した納骨室を有するもの、数段からなる階段状のもの、箱形の納骨室兼遺体安置場所の上に、「高い盛土」の横断面をかたどったと思われる装飾を施したり、伝統家屋を精巧に模倣した納骨室を設置したものなどがある。ウロスを身にまとった祖先の姿やオランダ時代初期における植民地首長の制服を身につけた祖先の彫像が、墓の上に設置されているものもある。

しかしながら、ここで強調したいのは、多くのモルタル改葬墓が、納骨室を兼ねた遺体安置のための空間（以下墓室と称する）を有することである。[15] 墓室内部は、小さなものでも、おとなが腰をかがめて立つことができるほどの高さと数人分の棺桶を安置するための面積が確保されている。納骨室が上部に造設されているモルタル改葬墓の場合、上部の納骨室には改葬されたなかで最上位世代の者の遺骨のみが別納され、墓室内部に作られた棚の上にはそれ以下の世代の者の遺骨が、そして、墓室の底面には遺体を入れた棺桶が安置されることが一般的である。今日のトバ社会において、このようなモルタル改葬墓は、トバ語でセメントをあらわすシミン（*simain*）ないしはインドネシア語で記念碑などを意味するトゥグ（*tugu*）という表現で言及されることが多い。[16] ただし、改葬儀礼などの際の儀礼的挨拶においては、モルタル改葬墓であっても「高

い盛土（タンバック・ナ・ティッボ）」ないし「堅い石（バトゥ・ナ・ピル）」と表現される。

Ｌ村では、山腹の緩斜面など水利条件が悪く農耕利用に適さない場所六ヶ所が共同墓地とされているが、その他にも村の南辺を東西に走る幹線道路沿いや村の中の小路沿いに墓が点在する。また、集落の敷地内や集落のすぐ外に墓が作られることもある。Ｌ村における一九九四年の調査では、四つの石棺と六七基のモルタル改葬墓の存在が確認された。遺骨の収納を目的としないモルタル埋葬墓は一〇六基あった。正確な数は把握していないが、この他に遺体を土葬した墓所に作られた新旧の盛土が数多く存在していた。

三　葬儀と埋葬の事例

本節では、Ｌ村で私が参加する機会を持った葬儀の中から四事例を取り上げ、系譜存続への貢献度に応じた葬儀と埋葬の具体例について検討する。

（Ａ）孫を持つ人の葬儀（以下の二事例とも、死者およびその配偶者は農民であった。）

［サウル・マトゥアの事例］　一九九四年八月二四日と二五日の両日、その数日前にＬ村の自宅で病死した女性（以下Ｓとする）の葬儀が行われた。Ｓの年齢は不祥だが、七〇歳前後であると思われる。ＳはＬ村内の別の集落で生まれ、夫の集落に婚入してきた。Ｓの子供は長男以下皆すでに結婚し、葬儀には数多くの孫も参列した。このため、Ｓの葬儀はサウル・マトゥアと称され、村外から雇われたゴンダンの伴奏によるマノルトルが行われた。ジャンバルでは水牛の肉が分配された。Ｓの遺体は棺桶に入れられ、集落の敷地の隅にあるモルタル改葬墓の墓室内に安置された。この改葬墓は一九九三年に完成したばかりで、この葬儀の時点では遺骨を収納する改葬儀礼はまだ行われていなかった。女性は結婚後も出身父系氏族に帰属するとみなされ、姓に相当するマルガも変更されないが、埋葬および改葬の対象としては夫方集団の一員と位

置づけられるため、Ｓの遺体は夫のリネージが建立したモルタル改葬墓内に安置されたのである。遺体の安置後すぐに、墓室入口の左右に置かれた粉ミルクの空缶にオップオップが植えられた。

［サリ・マトゥアの事例］ 一九九四年一月一五日、Ｌ村の自宅で長らく病気療養中だった七九歳の男性（以下Ｊとする）が死亡した。一月一八日と一九日の両日にかけて行われたＪの葬儀は、サリ・マトゥアと称された。Ｊには八人の子供がいたが、このうち息子一人と娘一人が未婚だったからである。葬儀の内容は基本的にＳの葬儀と同様であり、マノルトルと水牛のジャンバルは行われたが、数人から成るブラスバンドが村外から雇われてマノルトルの伴奏をした。Ｊの遺族はゴンダンの伴奏を希望したが、Ｌ村の成人男子との合議の場において、ゴンダンはこの場合不適切と判断されたのである。葬儀の内容に関しては、遺族の希望を聞いた上で、慣習村の成人男子が故人の家族状況等を勘案して決定する。Ｊの葬儀の場合、すでに数多くの孫はいるものの、未婚の子供がいることと、長男が妻と別居中で妻は葬儀にも参列しなかったことを理由に、ゴンダンの伴奏が認められなかった。棺桶に入れられたＪの遺体は、集落近くの共同墓地に一九三九年に建立されたモルタル改葬墓の敷地内に土葬された。この改葬墓はＬ村でも大型の部類に属し、Ｊの三世代上の父系祖先以下、三四人分の遺骨と多数の遺体を安置している。この改葬墓には十分な広さの敷地が確保されており、このリネージに属する村人で孫を持つ人が死亡した時は、その敷地内に遺体が土葬されることが多い。埋葬後すぐにひざ丈ほどの盛土が築かれ、その上に木製の十字架が立てられるとともに、オップオップが植えられた。

右の二つの事例では、死去から数日後に葬儀が行われている。これは、メダンやジャカルタなどの移住先から、子孫が参集するのを待つためである。どちらの事例でも、ジャンバルの際に水牛の肉が分配されている。また、ガベ（子孫が多いこと）の証しとしてのマノルトルが行われているが、子供が全て結婚しているＳの葬儀ではゴンダンの伴奏だったのに対して、Ｊの葬儀では未婚の子供がいることと長男夫婦の事情によってゴンダンは認められず、ブラスバンドの伴奏となった。両事例とも、すでにリネージのモルタル改葬墓が建立されていたので、Ｓの遺体は改葬墓の墓室内部に安置され、Ｊの遺体は改葬墓の敷地内に土葬された。Ｓの事例ではいくぶん変則的ではあったが、どちらの場合も孫を持つ印としてのオッ

プ・オップが植えられた。

（B） 孫を持たない人の葬儀

［マテ・マッカルの事例］ 一九九四年八月二六日未明、L村に住み教員をしていた五六歳の女性（以下Mとする）が、病気療養先のメダンの病院で死亡した。車に載せられたMの遺体は、約五時間かけてその日の朝のうちにL村に運び込まれ、翌八月二七日にMの葬儀が行われた。Mの家族は教員の夫と大学生の長男、そして高校生の長女である。子供たちは結婚していなかったため、この葬儀はマテ・マッカルと称された。村外から雇われたブラスバンドが讃美歌の伴奏をしたが、マノルトルは行われなかった。ジャンバルの際には、ブタの肉が分配された。棺桶に入れられたMの遺体は、集落に近い共同墓地にあるモルタル改葬墓の墓室内に安置された。一九八〇年に建立されたこの改葬墓は、Mの夫の父とその二人の配偶者を最上位世代としたリネージの改葬墓であり、その三人の遺骨と、父系リネージの者と配偶者のうち八人分の遺体が安置されていた。近村から婚入してきたMの遺体は、Sの場合と同様、夫のリネージの改葬墓内に安置されたのである。

［マテ・ポンゴルの事例］ 一九九三年二月九日の朝、数日間病床に就いていた一歳になったばかりの男児（以下Yとする）が、L村の自宅で病死した。Yの葬儀では、L村の女性たちと近隣から弔問に訪れた近親者が午後になって参集しただけで、ごく一部の者を除いてL村の成人男子は参集しなかった。マノルトルもジャンバルも一切行われず、女性たちがYの遺体を囲んで座り、牧師が到着するまでの間、遺族に対する短い慰めの挨拶をはさみながら次々に讃美歌を歌い続けた。ミニバスの運転手をしていたYの父親は、死去の知らせを受けることができず、夜になるまで帰宅しなかったが、牧師によるキリスト教式の祈禱の後、Yの遺体は速やかに家の外へ運び出された。近隣に住む男たちが木片で工作した簡素な木棺に入れられたYの遺体は、父親の帰りを待たずに、集落の近くにある共同墓地内の空き地に土葬され、その上にはわずかに土が盛り寄せられただけだった。

右の二つの事例を比較すれば、孫を持たない死者であっても、子供の有無で儀礼内容や埋葬方法が大きく異なることが

理解できる。孫がいなくとも、結婚して子供がいる場合には、Mの葬儀のようにL村の成人男子も参会してアダットに則った儀礼が行われる。孫のある死者の葬儀と比較してマノルトルを欠くが、ブタの肉片を分配するジャンバルが行われ、アダットに則った葬儀としての社会的承認が与えられる。一方、Yのように幼少の場合は言うまでもなく、未婚者の葬儀であるマテ・ポンゴルは、葬儀区分の中での位置づけが最も低い。マノルトルやジャンバルなどアダットに則った儀礼要素を欠くため、多くのトバ人は「未婚者の葬儀ではアダットの式次第（アチャラ・アダット、*acara adat*）はなく、教会の式次第（アチャラ・グレジャ、*acara gereja*）しか行われない」と述べるのである。ここで注意したいのは埋葬方法である。Yの墓所の上に作られた小さな盛土は、まさにタノマンと称されるものである。先に引用した男性の言葉に従えば、Mの場合も墓所の上に同様のタノマンを築くことになるはずだが、実際にはMの遺体は改葬墓の墓室内に安置された。今日のL村では、Mのようにマテ・マッカルの死者の場合、共同墓地の空き地に土葬して墓所にモルタル埋葬墓を作るか、すでに建立されているリネージのモルタル改葬墓に埋葬（墓室内に安置ないしは敷地内に土葬）することが一般的である。

むすび

本稿では、トバ社会における一次葬に焦点を絞り、系譜存続への貢献度に応じて葬儀内容や埋葬方法がどのように異なるかを示した。儀礼内容についてみると、マノルトルの有無、ジャンバルの有無や供犠獣の種類、オップ・オップの植えつけの有無が、多少の変則性を伴いながらも、葬儀を区分する指標となっていた。子供を亡くした親がいかに富裕であっても、未婚の子供の葬儀に際してマノルトルを行ったり、水牛の肉を分配することはできないのである。

それに対して、埋葬方法や墓の建立に関しては、遺族の裁量による部分が大きいと言える。リネージの成員に次々と新しい死者が出る以上、大型のモルタル改葬墓であっても、墓室内や敷地内に棺桶を無限に収納し続けることは物理的に不可能である。したがって、遺体をモルタル改葬墓の墓室内に安置したり、敷地内に土葬する措置は、将来における棺桶の

除去、すなわち改葬を前提としてなされているものと理解できる。改葬の条件は父系子孫としての男の孫を持つことなので、孫を持つ人の葬儀の事例として検討したSやJの遺体がモルタル改葬墓に埋葬されたのは容易に納得できる。なぜなら、死去の時点ですでに息子夫婦から生まれた男の孫を有していたSやJは、改葬が一般化した今日のトバ社会においては、改葬儀礼を行うための親族間の合意が形成され、かつ経済的条件が整えば、その改葬墓ないしは新しく建立される改葬墓に遺骨を再安置すべく改葬される可能性が高いからである。

ところが、孫を持たない死者の事例で紹介したMの場合も、遺体はモルタル改葬墓の墓室内に安置されたのだった。この点についてMの義兄は「すでに親族をまとめた改葬墓があるからだ」と説明した。しかし、一歳で病死したYの場合、リネージのモルタル改葬墓（Jの事例で言及した墓）があるにもかかわらず、そこには埋葬されず、共同墓地の空き地に土葬された。したがって、リネージのモルタル改葬墓があるというだけでは、Mの遺体を孫を持つ死者と同様に処置した理由として十分ではない。そこで重要になるのは、Mには孫はいないが息子がいる点である。つまり、死去の時点で孫がいなくても、息子がいればほぼ確実に父系出自をたどる孫ができるものと遺族は想定し、将来息子夫婦から男の孫が生まれた後の改葬を前提として、Mの遺体をモルタル改葬墓の墓室内に安置したと理解できるのである。

かつて墓所の上に盛土の墓を築いていただけの時代には、孫の有無という基準によって墓の形態には厳然たる区別が存在した。しかし、土葬した墓所の上に作られるモルタル埋葬墓については、系譜存続への貢献度に応じた形態や規模の区別は定められていない。未婚者、とりわけ小さな子供のモルタル埋葬墓は小規模で簡素なものである傾向は認められるが、先述の男子大学生の墓のように、未婚者にもかかわらず、都市に住む裕福な親によって、モルタル埋葬墓としては大型の墓が建立されることもある。また、孫を持たない死者でありながらもモルタル改葬墓に埋葬されたMの事例から明らかなように、モルタル改葬墓への埋葬は、孫の有無ではなく息子の有無という新たな基準によって判断されているとみなしてよいだろう。今日のトバ社会において、死者が孫を持つか否かという基準は、一次葬における儀礼内容の選択に関しては重要性を保持しているが、死去時の埋葬方法を区分する基準としては、しだいに意義を失いつつあると考えられるのであ

る。その変化の背景には、移住者の増加に伴うトバ社会の経済力向上によって、改葬が一般化した点を指摘できよう。一九六〇年前後から隆盛した改葬儀礼は、今日衰えるどころか益々盛んであり、Mのように息子を持つ死者であれば、近い将来改葬の対象とされて、モルタル改葬墓の墓室や敷地から遺体の入った棺桶が除去される可能性が極めて高くなっているのである。

註

(1)本稿に関連した現地調査は、一九九一年六月より一九九四年九月までの間に、計五回、延べ一二ヶ月間にわたって実施された。調査の一部は、平成二年度文部省アジア諸国等派遣留学生制度と平成四年度および平成五年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究、代表加藤剛京都大学教授）の資金援助を得て行われた。なお、本稿は平成八年度文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)）による研究成果の一部である。

(2)L村の隣村で調査したカニンガムも同様の指摘をしている〔Cunningham 1958：78-97〕。

(3)ここではトバ人の世帯観念に従い、核家族を世帯の単位としている。そのため、夫婦と未婚の子供たちが夫ないし妻の親と同居している場合、二世帯として計上している。

(4)他にも、故人の生前の威徳や横死者ではないことが、キリスト教以前の改葬の条件として指摘されるが、今日では父系子孫としての男の孫を持つこと、すなわち息子夫婦から生まれた男の孫を持つことが、改葬の対象者に求められるほぼ唯一の条件とされている〔池上 一九九五：六五-七、八三-四〕。

(5)自殺、産褥死、ハンセン氏病による死者は横死者とみなされ、通常の葬儀を経ずに近親者によって速やかに埋葬されるという。この点については拙稿〔一九九五：六七〕を参照。それ以外の死者に関しては、原則として本節でまとめる葬儀区分が適用される。ここで「原則として」という表現を用いたのは、系譜関係や婚姻関係によらない居留者に対してはこれらの葬儀区分が適用されないとする村人の指摘があるからである。

(6)打楽器オーケストラによって演奏される音楽もゴンダンと表現される。なお、ゴンダンについては、民族音楽学の立場から岡崎〔一九九六〕が詳述している。

(7)シベスは、男の孫がいない場合や息子たちが父親より先に死亡した場合、息子の代替としてシ・ガレ・ガレ（*si gale-gale*）と呼ばれる木製の操り人形を操作してマノルトルさせることが許されていたと記述しているが、オランダ時代の行政官や宣教師のように長くトバの土地に滞在する者であっても、それを目撃することはごくまれだったと付記している〔Sibeth 1991：79〕。L村ではシ・ガレ・ガレについて言及されることはなく、孫のいない場合はマノルトルは行われないというのが村人の共通の理解だった。

(8)シベスは、オランダ時代に医師として北タパヌリに滞在した経験を持つヴィンクラーの記述〔Winkler 1925：55〕に依拠しながら、かつては木の幹を材料としたくり貫き式の木棺が用いられたが、木棺を用意する財力のない者はムシロに包まれて土葬されることが多かったと記している〔Sibeth 1991：76〕。今日では、既製品の組み合わせ式木棺を村外から購入することが一般的である。

(9)彼らは単に「孫」（パホップ、*pahompu*）という表現を用い、その性別や系譜上の位置づけについて明言しなかったが、それは父系子孫としての男の孫を想定していたと考えられる。ただし、サリ・マトゥアの説明に際して例示したように、死者に娘しかいない場合でも死者にとって孫がいれば、ここに述べた墓の区分が準用される。

(10)本稿では、植物のトバ語名と学名の対応はSarumpaet〔1994〕に依拠した。

(11)この部分は、改葬墓の歴史的変化について詳述した拙稿の一部〔一九九五：七〇-八〕を要約したものである。

(12)ヴィンクラーは、植樹した盛土型の改葬墓の名称を単にタンバックと記しているが〔Winkler 1925：132-133〕、私の調査の範囲では、改葬した遺骨を再安置した改葬墓としての盛土は、ほとんどの場合「高い盛土（タンバック・ナ・ティッボ）」と呼ばれ、孫のある死者の遺体を土葬した墓所に築かれたタンバックとは区別されていた。

(13)トバの石造墓に関しては、豊富な図版を用いて詳述しているBarbier〔1983：113-39〕とTichelman〔1942〕を参照のこと。

(14)オランダ統治下の一九一〇年代にトバ湖周辺地域と北スマトラの東海岸部を結ぶ道路事情が改善され、一九二〇年代以降、L村でも外部からもたらされたセメントを用いたモルタル改葬墓が建立されるようになった〔池上 一九九五：七四-八〕。L村のモルタル埋葬墓には建立年代の不明なものが多かったが、おそらくほぼ同じ時期から建立されはじめたと推測され

る。

(15) L村では、六七基のモルタル改葬墓のうち、六三基（九四・〇%）が遺骨だけでなく遺体の安置を前提に建立されていた。すなわち、五三基（七九・一%）は墓室を有していたし、墓室を持たないもののうちでも、一〇基（一四・九%）は墓の範囲を示す外枠の内側に遺体埋葬用の敷地を確保していたのである〔池上 一九九五：七四-八〕。

(16) ジャカルタ中心部に聳え立つ独立記念塔のようなモニュメントとしての建築物がトゥグと称されるが、元来はジャワ語で「石柱」を意味する言葉である〔Prawiroatmodjo 1988：272〕。なお、ジャワ語での原義を調べるに当たって、富山大学の黒柳晴夫先生から資料提供を受けた。この場を借りて深謝いたします。

参考文献

Barbier, J. P. 1983. *Tobaland : The Shreds of Tradition.* Geneva : Musée Barbier-Müller.

Bruner, E. M. 1972. Batak Ethnic Associations in Three Indonesian Cities. *Southwestern Journal of Anthropology* 28(3) : 207-229.

Cunningham, C. E. 1958. *The Postwar Migration of the Toba-Batak to East Sumatra.* Cultural Report Series 5. New York : Yale University Southeast Asia Studies.

池上重弘　一九九五「高い盛土、堅い石—トバ・バタック族における改葬墓の歴史的変化をめぐって—」『南方文化』二二：六二-八九

Ikegami, S. 1997. Historical Changes of Toba Batak Reburial Tombs : A Case Study of a Rural Community in the Central Highland of North Sumatra. 『東南アジア研究』三四（四）（印刷中）

Kantor Camat Balige. 1992. *Hasil Pencacahan Lengkap Sensus Penduduk 1990.* Balige : Kantor Camat Balige.

岡崎淑子　一九九六「東南アジアにおける伝統音楽の復興と発展-北スマトラ、トバ・バタック社会の場合-」『宗教と文化（聖心女子大学キリスト教文化研究所）』一七：五五-九〇

Pedersen, P. B. 1970. *Batak Blood and Protestant Soul : The Development of National Batak Churches in North Sumatra.*

Grand Rapids, Michigan : William B. Eerdmans Publishing Company.

Prawiroatmodjo, S. 1988. *Bausastra Jawa-Indonesia (Jilid II)*. Jakarta : Gunung Agung.

Sarumpaet, J. P. 1994. *Kamus Batak-Indonesia*. Jakarta : Penerbit Erlangga.

Schreiner, L. 1994. *Adat dan Injil : Perjumpaan Adat dengan Iman Kristen di Tanah Batak*. Jakarta : BPK Gunung Mulia.

Sibeth, A. 1991. *The Batak : Peoples of the Island of Sumatra*. London : Thames and Hudson.

Tichelman G. L. 1942. Bataksche Sarcofagen. *Cultureel Indië* 4 : 246-262.

Vergouwen, J. C. 1964. *The Social Organisation and Customary Law of the Toba-Batak of Northern Sumatra*. Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-en Volkenkunde, Translation Series 7, translated by J. Scott-Kemball. The Hague : Martinus Nijhoff.

Warneck, J. 1909. *Die Religion der Batak : Ein Paradigma für die animistischen Religionen des Indischen Archipels*. Leipzig : Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung.

————1977. *Toba Batak-Deutsches Wörterbuch*. Den Haag : Martinus Nijhoff.

Winkler, J. 1925. *Die Toba=Batak auf Sumatra in gesunden und kranken Tagen : Ein Beitrag zur Kenntnis des animistischen Heidentums*. Stuttgart : Chr. Belser A. G., Verlagsbuchhandlung.

(静岡県立大学短期大学部・文化人類学)